

林 緑子

カナダのオタワ国際アニメーション映画祭は、1976年にオタワ市で開始され、2005年より毎年6月後半に行われている北米最大規模のアニメーション映画祭である。アニメーションの分野では、世界4大映画祭の一つとして国際アニメーションフィルム協会 (Association Internationale du Film d'Animation /ASIFA) に公認され、グランプリ作品はアメリカ・アカデミー賞の短編・長編アニメーション部門へ自動的にノミネートされるという点でも重要な映画祭である。この映画祭は、芸術性と商業性、異種混交性を主眼としているが、今回の2019年度はとくに多様性とセクシュアリティを前面化している短編作品を取り上げている点に特徴があった。

本映画祭を主催するカナダ映画協会 (The Canadian Film Institute/CFI) は、1935年に発足したカナダ政府公認の非営利民間団体であり、オタワ市のダウンタウンの中心に事務所を構える、世界で2番目に古い映画協会である。国内外における文化的・教育的な映画の制作と研究を促進するために映画上映や講演の開催、配給や書籍の出版も行っている。その常設スペースとして、上映・講演が可能な245席の多目的ホールであるアルマダンカンサロンと、シアターや事務所を構えるアーツコートがある。また、毎年、欧州連合映画祭、アフリカ映画祭、ラテンアメリカ映画祭など、ヨーロッパからアジア、アフリカ、中近東に至るまでのさまざまな国の作品を紹介する特集上映や映画祭も開催されている。こうした施設や活動の一部は、会員システムと寄付に支えられている。

また、オタワ国際アニメーション映画祭の主な後援団体であるカナダ国立映画製作庁 (National Film Board of Canada/NFB) は、1939年にイギリスのドキュメンタリー映画監督・研究者であるジョン・グリアソンを所長に迎えてオタワ市に設立された。戦時下にはプロパガンダ映画が制作され、1941年にはイギリスのアニメーション制作者であるノーマン・マクラレンの入庁と共にアニメーション部門が設置された。1950年からは、政府の直接的

な管理下から独立し、ドキュメンタリーとアニメーションを中心に、独自の興行方式による作品配給・上映と制作者育成を行うようになった。1950年から56年の間には資金とスタッフが削減され、スタジオがモントリオールへと移転された。その一方で、2002年からはデジタル技術部門に力が入られるようになった。こうした経緯を経る中で、NFBは専用スタジオを維持し、制作者のための助成金制度を運営しながら、児童向けワークショップや作品の著作権管理、配信なども行ってきた。

NFBはまた、LGBTQ2に配慮した実写とアニメーション作品のプロデュースも行ってきた。2003年には、LGBTQ2をめぐる平等の問題について子供たちに考えてもらうため、実写とアニメーションの混合作品 *Lynne Fernie Apples and Oranges* を製作した。短編アニメーションに関しても2016年より *Diane Obomsaw I Like Girlsin* (2016)、*Chintis Lundgren Manivald* (2017)、*Ann Marie Fleming A Short Film About Tegan & Sara* (2018)、*Vivek Shraya Reviving The Roost* (2019)、*Chris Dainty Shannon Amen* (2019) など、LGBTQ2に触れる作品を毎年1本以上製作している。NFBのウェブサイトでは、実写を中心としたLGBTQ2を啓発する作品も公開しており、関連する映画祭への協力も行ってきた。

カナダは全般的に、多様性を重視し、人種、民族などに加えLGBTQ2の理解に努めている。それは、オランダ、ベルギー、スペインに続き世界で4番目に同性婚を合法化していることから明らかである。同性婚は2003年から段階的に適法とされ、2005年にはカナダ全土で合法となった。カナダの中でもトロント市は2014年にLGBTQ2の世界的祭典であるワールド・パレードを主催し、近年ではLGBTQ2が住みやすい都市の世界ランキング第3位に選ばれている。カナダの電子渡航認証eTAの性別選択も、男女その他の3区分に分かれている。LGBTQ2の象徴であるレインボーマークが学校をはじめとして公共施設のいたるところに表示され、小学校教育にも組み込まれ、図書館

や本屋にも専門のコーナーがある。2016年のトロント、バンクーバー、モントリオールのゲイプライド・パレードには、ジャスティン・トルドー首相も、オンタリオ州知事、トロント市長とともに参加している。さらに2017年にはトルドー首相はLGBTQ2コミュニティへのカナダ史における過去の差別に対して謝罪表明を行い、各党首も謝罪コメントを提出した。オタワ市にある国立歴史博物館の国史の常設展示では、現代のコーナーにLGBTQ2の平等化への取り組みも紹介されている。

これらのことに加え、NFBの発祥の地であるオタワ市は、多様な作品を上映する映画祭を開催するにふさわしい場所だといえる。カナダは、先住民と、大航海時代からの移民であるイギリス系、フランス系、スペイン系、ポルトガル系の人たちに加え、近年はアジア系移民も増加傾向にあり、国が制限を設けるほどの移民大国である。NFBの歴史を概観すると、50年代までの映画作品は英語中心で他の言語の作品は最小限しか制作されなかったが、60年代に入るとフランス語圏出身の映画監督の努力によりフランス語作品も作られるようになった。さらに80年代からはGil Cardinalの*Foster Child* (1987) など先住民族の監督による作品も出てきた。オタワをその拠点として始まったNFBでは、このように多民族が交渉関係を結びながら映画製作が行われてきた。

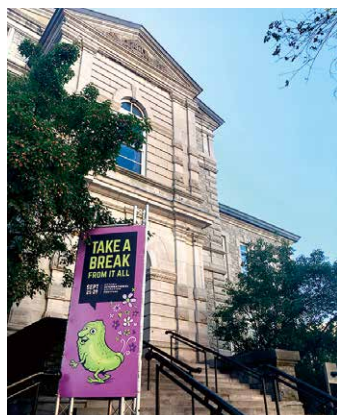
そして、オタワ市街は経済階級の異なる人々が混在して生活を営んでいる点で、カナダ国内では稀有な場所であり、このことは、多民族の交渉関係を調整しながら運営されてきたNFBと、多様性に主眼を置くCFIを象徴している。カナダでは一般的に人々が経済階級ごとに異なる区画に住み分けているため、オタワのように日常生活で他の階級と交わる場は少ないようだ。オタワの場合は、一方では、カナダの首都であることから、街の中心部に連邦政

府の政治的機能が集中している。フランス語圏であるケベック州ガティノーとの境目にもなっているオタワ川付近には、国立歴史博物館、国立美術館、国際会議場、国会議事堂、国会図書館など公的機関の建物が集中して建っている。しかし他方で、それらに近接するダウンタウンの表通りにゴミ箱が等間隔に並び、24時間スーパーやショッピングモール、市場などがあり、ときおり物乞いをする低所得者層らしき人々が何をすることもなく道のわきに1日中座り込んでいる。こうした特徴のあるダウンタウンに映画祭の会場が点在しているのである。

2019年のオタワ国際アニメーション映画祭の開催期間は、9月25日-30日であり、会場はパイタウンシネマ、アーツコート、国立アートセンター、国立美術館などで上映や講演が行われ、パーティがPUB101などで開かれていた。今回の入場者数は延べ28000人。プログラムとしては長編・短編国際コンペティション、審査員作品上映やマスタークラス、制作ワークショップ、学生リクルート、商業見本市 (TELEVISION ANIMATION CONFERENCE/TAC) などがあった。

この映画祭にはさらに2つの側面に関わって特筆すべき特徴がある。1つは、実験的な作品から娯楽的な作品まで多様なアニメーション作品が、独自の視点で選ばれているという側面。もう1つはジェンダー・セクシュアリティに関わる側面である。

1つ目に挙げた、コンペティションで多様な作品が独自の観点で選定されている背景として、フェスティバル・ディレクターがほぼ単独で一次選考を行ってきたことが大きい。この映画祭では、1990年代初頭よりアーティストック・ディレクターを務める批評家のクリス・ロビンソンが主となり、コンペティション作品の一次選考を行ってきた。毎回、全体として実験的な傾向が強いとはいえ、



作品の種類はバラエティに富み、娯楽性もある上で批評的な作品も数多くみられる。同じ人物が中心となって作品を選定しているために選考に多少の偏りがあるものの、総じて一貫性のあるプログラムとなっている。また、映画祭全体のプログラム構成もロビンソンが中心となって決定されるため、方向性や特徴が明確になりやすいともいえる。今回は実写とアニメーションの区分けを無効にするような実験的作品として評価されて短編グランプリを受賞したThomas Renoldnerの*DON'T KNOW WHAT* (オーストリア)や、賞は逃したもののSNSの本人認証システムについて、コミカルに批評的視線を投げかけるSean Buckelewの*I'm Not A Robot* (アメリカ)などがあった。後者の作品では、認証が抽象的なテーマのため、ユーザーは最後まで不正解でログインできないという、人とAIのギャップやシステムの機能不全を描いている。

もう一つの特徴的側面については、短編作品の制作者に女性が多く、従来に比べて主題的にもジェンダー・セクシュアリティに関わる作品に変化が見られたことが挙げられる。短編・長編作品の監督はそれぞれ約3分の1しか女性ではなかったが、学生パノラマプログラムでは約3分の2が女性制作者であった。短編作品には、LGBTQ2がテーマか、あるいはそれに触れる内容や設定になっている学生や若手制作者による作品が散見された。具体的には、ある家族を軸にセクシュアリティとキャラクター同士の複雑な関係性をユーモラスに描いたChintis Lundgrenの*Toomas Beneath the Valley of the Wild Wolves* (エストニア、クロアチア、フランス)や、ナメクジ人間とXジェンダーの女性との交歓をカラフルな色で快楽的に表現したSophie Gateの*Slug Life* (イギリス)などが、これまでの国際アニメーション映画祭では寡少なタイプの作品として印象的であった。

実際、世界4大国際アニメーション映画祭と呼ばれている、フランスのアヌシー国際アニメーション映画祭、クロ



アチアのアニメフェスト、日本の広島国際アニメーションフェスティバルではこれまで、異性愛規範的な女性作家による自身のセクシュアリティに言及した短編作品は時折見られたものの、規範的なジェンダー・セクシュアリティを混乱させたり無効化させたりするような作品は稀だった。これらの映画祭の短編アニメーション分野では、LGBTQ2に言及した作品制作を積極的に取り上げる様子はあまりみられず、個々の作家の興味の範囲内で制作されるか、LGBTQ2の関連団体が啓発目的で制作することが主であった。

これに対して、オタワ国際アニメーション映画祭は、商業性と芸術性を混在させているだけでなく、国や後援団体のNFBとともに、ジェンダー・セクシュアリティの観点を重視しているといえる。観客は、オタワ国際アニメーション映画祭がLGBTQ2専門の映画祭ではないからこそ、そこで上映されている作品を通じて、気軽に多様性やセクシュアリティについて触れ考える機会を持つことができる。この点で、オタワ国際アニメーション映画祭は世界のアニメーション文化にとって貴重な場となっていることは間違いのないだろう。

参考文献

「カナダ LGBT カナダライフ」<https://ovrsee.ca/canadalife/lgbt/> (2020年2月10日最終確認)

斎藤文栄「カナダにおけるLGBTの就労をめぐる状況」『独立行政法人 労働政策研究・研修機構』2017年11月 https://www.jil.go.jp/foreign/labor_system/2017/11/canada.html (2020年2月10日最終確認)

さな「DAY13: カナダの小学校でみるLGBT教育 2018 9 17 レズビアン日記 in カナダ」『Rainbow Life』<https://lgbt-life.com/topics/sana13/> (2020年2月10日最終確認)

土居伸彰「アートワード カナダ国立映画製作庁」『artscape』<https://artscape.jp/artword/index.php/%E3%82%AB%E3%83%8A%E3%83%80%E5%9B%BD%E7%AB%8B%E6%98%A0%E7%94%B%E5%88%B6%E4%BD%9C%E5%BA%81> (2020年2月10日最終確認)

National Film Board of Canada, *The Canadian Encyclopedia*, 2015 <https://www.thecanadianencyclopedia.ca/en/article/national-film-board-of-canada> (2020年2月10日最終確認)

NATIONAL FILM BOARD OF CANADA
<https://www.nfb.ca/> (2020年2月10日最終確認)

Ottawa International Animation Festival
<https://www.animationfestival.ca/> (2020年2月10日最終確認)